

VI. 中国訪問記

岸川正大

柔らかい白い絨毯から真っ青な海へと変わり、その一部に黄土色で扇形の変色域を認めた。飛行機は急に大きく右へ旋回し、眼下には一面の田園風景が飛び込んで来た。上海国際空港が近づいてきたのである。一瞬、この数カ月間の事が頭の中を駆け巡り、不安と興奮を覚えた。

《きっかけ》

1989年12月、原爆資料センター調査部に中国より一人のお客さんを迎えた。中華人民共和国衛生部工業衛生実験所の陶教授で、コンピューターを使った統計処理の短期研修の為であった。調査部の三根助手が言葉の壁を乗り越えて、約一ヶ月間、本当に一生懸命に研修の手助けをした。そして、当資料センターの完備されたコンピューターへの驚きは勿論のこと、初めての日本の忘年会とボウリング大会への参加を思い出に、北京へ帰国された。その後お礼状と共に中国衛生部より、研究交流のために中国訪問の招待状が送られてきた。

センター長の奥村教授より訪中意志の打診があったときに、即座に決心した。数千年の歴史を持ち、日本の歴史にも多大な影響を及ぼした中国、医学的にも古来多くのことを学んだ隣国、欧米とはまた違った憧れと、郷愁さえ感じる大陸を一度はこの目でみたいと常々思っていたからである。中国へは奥村センター長、三根助手、そして私の三人が訪問することとなった。

《北京訪問》

上海で入国手続きを済ませた後、そのまま国内便にて6月19日夜11時前に北京上空まで達した。眼下にはおそらく高速道路であろうか、並列して真っ直ぐにのびる燈の他には真っ暗闇で日本の夜景とは全く異なり、少々戸惑いながら北京空港に到着した。夜中にもかかわらず、到着ロビーに陶教授が出迎えをしてくれていた。半年ぶりの再会の挨拶もそこそこに、工業衛生実験所さしまわしの公用車「上海」に乗り込み、一路宿舎へと向かった。約40分の道は両側に外灯が並び、先ほど機上より見た唯一の燈がやはりハイウェイであった。寝静まった街と思っていたが、目が慣れてくると両サイドには自転車の往来があり、その大半が若い男女のカップルであったことは私の不安を少なからず取り除いてくれた。日本と違い車が右側通行であることに気付いた頃、やっと北京市内の宿舎、大都飯店(Da Du Fandian)に到着した。時計は12時をすでにまわっていた。

翌朝、長崎にいる時には考えられないくらい早く起床した私は、カーテン越しの窓下に早くも自転車のラッシュ・アワーが展開しているのにはビックリした。話には聞いていたが、中国の人々は本当に早起きのようなのである。7時過ぎの朝食は非常に安くて美味しく、また珍しかったのでゆっくりと時間をかけて賞味した。8時には迎えの「上海」に乗り、憧れの中国での第1日目、正確には北京「第2日目」からの行事がスタートした。

工業衛生実験所の一室にて、王作元(Wang

Zuoyuan) 所長, 元所長の魏履新 (Wei Lu-Xin) 教授, 尉可道 (Wei Kedao) 副所長, 和順福 (He Shunfu) 副所長, 李文元 (Li Wenyuan) 所弁主任による歓迎のセレモニーが行なわれ, お互いの自己紹介とビデオによる研究所の概要の説明を受けた。勿論, 陶祖範 (Tao Zufan) 教授も同席し, また数年前に奥村教授の教室に留学していた陳金娣 (Chen Jin-Di) 先生も同席した。

かつては病院の建物だったと言うこの研究所は4階建てで, 1965年, 中国衛生部直属の研究機関として設立されたもので, 8研究室(研究部門)から成っていた。いただいた名刺と見せてもらった研究内容をもとに日本語に意識すれば, ①放射線障害診断治療研究室, ②放射線衛生研究室, ③核災害緊急管理研究室, ④放射線生物影響研究室, ⑤環境放射線衛生研究室, ⑥放射線線量測定研究室, ⑦放射線測定技術研究室, ⑧放射線医科学情報研究室と言うことが出来よう。

所長の王教授は国際放射線防護委員会の委員等を務め, 国際的にも活躍されている人である。流暢な英語で, 中国におけるこの研究所の重要な役割を説明するその姿は, 非常に魅力的であった。

実質4日間の研究所滞在中, いくつかの部門の研究者と意見交換をおこない, 研究所の各研究室も見せてもらった。立派な研究設備が完備しているとは決して言えないが, むしろ質素な研究室の中で熱心に黙々と頑張っているという印象を受けた。各研究室で必ず一言二言質問をしてみたが, ほとんどの研究員の先生がはにかみながら答えてくれた。ある研究室の実験台には, センター長の奥村教授の論文のコピーが貼ってあり, 奥村先生の実験方法に準じた実験が行なわれていて, 興味深かった。

この研究所には臨床の病院の付設はなく, 人体病理に関するの見学をする箇所はなかった。私が病理医ということで, 研究所の2人の病理医を紹介してくれた。その内の1人は放射線影響生物研究室主任の高鳳鳴 (Gao Fengming) 教授である。高先生は英国への留学の経験がある実験病理学者で, 他の多くの研究者とは違って熱っぽく自分の研究について話をしてくれた。むしろ非常に親しみが持てる先生で, Environmental Mutagen Society の北京の理事長を務めている先生であった。

我々長崎からの3名の講演は広い講堂で行なわれた。演題は“Effect of Low Dose Radiation on Mammals(奥村)”, “Mortality of Atomic Bomb Survivors in Nagasaki (三根)”, “Effects of the Atomic Bomb Explosion in Nagasaki: A Medical Perspective (岸川)”である。副所長の尉先生の司会で始まり, 所長の王先生は最前列で熱心にメモをとりながら聞いておられた。6月の北京はそれほど暑いことはなかったが, 昼間に暗幕を引き, 冷房のかわりに旋風機にあたっての講演会は少々きつかった。思ったよりも多くの聴衆と, 鋭い質問は我々3名にとって非常に満足出来るものであった。最後に王所長の謝辞と共に, 各人に感謝状授与のセレモニーがあった。この時も講堂の自席にはジャスミンの匂いがするティーバッグ・スタイルのお茶が用意されたが, この熱い喉触りが非常に美味しく, 後かたづけに来たおばさんに断わって残りのティーバッグを数個もらった。お礼に“謝謝”と言ったら, 人懐っこく色々話しかけてくれて, あとに残った全部のお茶も持って行けとカバンに押し込んでくれた。残念ながら中国語は全く分からなかったが, 中国人の“ヒトの良さ”が感じら

れた。

元所長の魏教授は、我々の資料センターに滞在した陶先生の直接の上司である。本当に気さくな人柄の科学者で、私の乏しい語彙での英語が怪しくなると、綺麗な英語で助け船を出してくれたりした。中国の「高バックグラウンド放射能研究班」の班長で、その業績は日本にも紹介され高く評価されている。我々は原爆資料センターのセミナーで、陶先生から「高バックグラウンド放射能地域における癌とダウン症の発生」の講演を聞き非常に興味をもっていた。どうにかして長崎の被爆者の研究と結びつけた共同研究が出来ないかと、この訪中の計画をしている頃から考えていたが、なかなか言い出すキッカケがなく機会が見つからないまま3日間が過ぎた。我が原爆資料センターの今後の研究方向として、今まで2回の「資料センター・ワークショップ」や、運営委員会で提言された項目のひとつとして、海外に目を向けた研究がうたわれていた。また、ちょうど我々の進行中の研究が、「被爆者における老人性痴呆の疫学調査」であり、中国でこの分野の調査が出来ればその比較研究は非常に学問的に価値が高いと考えていた。

翌朝には北京を離れるという第4日目、無理を承知で陶先生を通じて所長の王教授、元所長の魏教授に話し合いの場をもって戴くようお願いした。多忙な執務の合間をぬって、両先生は関係者も同伴で午後に来てくれることになった。それこそ拙劣な英語で額に汗して放射線被曝と加齢促進の有無の関係を、中国の「高バックグラウンド放射能研究」と結びつけて共同研究したいと提案した。急な申し出であり、当然の如くいくつかの質問を受けた。「加齢研究」はあまりにも範囲が広いが、どのようにして判定するか？ 病理解

剖も考えているのか？ 私は神経病理に一番興味があり、しかも長崎市で被爆者の老人性痴呆の研究を計画していることを紹介した。中国の風習からして現在でもヒトの病理解剖は非常に難しく、神経病理学的に系統的に検索することはまず不可能に近いとのことであった。私も剖検による確定診断は無理と判断したので、老人性痴呆の疫学調査から始めることは可能かを尋ねた。両教授ともこれには賛意を示して戴き、基本的には共同研究を行なう事で準備を進めることになったのである。中国側の実質的な研究者は陶教授と決まり、長崎は岸川が研究費の申請をして、1993年スタートを目処に計画案を作る事となった。その日の夕方、答礼宴をセンター長がもった。私は心地よい疲れの中で、さほど冷えていないビールが喉にしみるようで、非常に美味しく感じられた。

23日早朝、「上海」が迎えに来てくれた。冷房車ではないが、クラシックでなかなか味がある車種である。中国製車種の中で、名車のひとつと聞かされた。今回の北京訪問最後のお勤めとして我々を乗せた名車は、秋に開催のアジア大会メイン会場の建設現場を通り抜け、一路北京国際空港へと急いだ。真っ直ぐに続くハイウェイの両サイドには背の高い樹木が整然と植えられ、時々自転車が横切る風景はのどかであった。

《上海訪問》

土曜日の午後、入国地の上海に再び戻ってきた。空港には「長崎大学・奥村寛教授」と書かれた紙を胸の高さに掲げた2人の中年男性が我々をにこやかに迎えてくれた。色白で美男子の羅濟程 (Luo Ji-Cheng) 先生と、日焼けした長身の王中和 (Wang Zhong-He) 先生である。いずれも上海第二医科大学附属

第九人民医院の放射線科の医師で、羅先生が放射線診断学が専門で放射線科の科長、王先生はフロリダをはじめアメリカ留学の経験を持つ放射線治療学の専門医である。冷房車の窓を開けると湿った熱風が中に吹き込んでくる。まさに梅雨明け直後の長崎の夏である。

上海市内のさほど広いとは言えない道路は北京と違い、人通りも多いように思われた。チェン・エンの著書「上海の長い夜」の中にも出てくる歴史的な建物がならぶ黄浦江の沿道に近接したホテル「和平飯店 (He Ping Fandian)」に着いた。カフェテリアで早速今日からのスケジュールの打ち合せである。私はこの湿気を十分に含んだ温風のために汗だくだだったので、シャワーを浴びたかった。しかし明日の講演原稿をあらかじめ送っていたので、通訳の王先生からは正確を期すために確認の質問が矢継ぎ早にとんできた。シャワーどころではない。驚いたことに王先生の質問によって初めて原稿内容にミスプリントが数カ所あることを知らされた。逆に言えば昨晚1日しか読んでないと言った王先生のすごい勉強ぶりに驚かされてしまった。その夜は、中国放射線医学の長老的存在の朱大成教授および、上海第二医科大学口腔医学院院長、同大学附属第九人民医院院長で、口腔顔面外科主任教授である邱蔚六先生から、前記の羅濟程先生、王中和先生とともに我々3名のために招待宴をもってもらった。邱教授は翌日から北京へ出張があり、我々の講演を聞くことが出来ないことを残念がっておられたが、我々としては逆に出張直前の忙しい中に歓迎宴を持ってもらって申し訳ない限りであった。朱教授は終戦直後に連合国による医学的視察の一員として日本をおとずれ、横浜で昭和天皇の一行と会ったことがあると話しておられた。フランス語が堪能で、英語も数年アメリカに

留学の経験があるだけにネイティブの発音と言っても良いほどのすばらしいものであった。アメリカ留学中に共産党革命があったようで、その時にすぐに帰国しなかったことが後年の文化大革命のときに、資本主義国アメリカのスパイ容疑をかけられて刑務所入りを余儀なくされたようである。自分の弟子の讒言により刑務所に入らなければならなかったようだが、人を憎む事を知らないかのような朱先生は本当に心の広い、人間味に溢れた素晴らしい先生であった。

月曜日に訪問した第九人民病院は上海第二医科大学の附属病院のひとつで、18の臨床科があったが、特に充実しているのは口腔顔面外科の施設であった。その研究棟も大きいのがあり、徐春楊副院長が出迎えと施設の概要を説明してくれたが、中国全土から口腔顔面の外科手術を受ける為に紹介されて来るそうである。研究棟の何榮根先生の研究室では口腔扁平上皮癌と小唾液腺より樹立した細胞を使った培養が行なわれており、日本製の顕微鏡写真装置が置いてあった。病理の研究室では女性の先生がチーフで、年間の外科診断材料が約2,000例くらいということであった。口腔病理だけの件数としても、これくらいの規模(口腔顔面外科関係約270床、外来1日約800人)の病院にしてはむしろ少ないかもしれない(ちなみに資料センター病理でも年間約4,000症例の診断)。病院自体は患者数(約800床、外来約3,000/日)にしては手狭で照明もやや暗い印象を受けたが、現在建設工事中で、1991年中には立派な新病院が完成するとの事であった。羅先生の放射線科では消化器系の透視が一番多いが、午前中20名、午後10名程の胃腸透視を行なうそうである。王先生は放射線治療学が専門だが、日に約30名の癌患者を扱うそうである。

我々の講演は整復外科大樓（口腔顔面外科研究施設）の会議室で行なわれた。冷房設備は勿論なく、聴衆の熱気のためか上海の湿気を含んだ気温のためかとにかく北京の講演会場よりも汗だくで少々まいってしまった。しかし王先生の一生懸命な通訳の姿を目にした時、その研究熱心な聴衆の姿とともに胸に熱いものがこみあげた。

火曜日は上海第二医科大学の5個所の附属病院のうちのひとつである瑞金病院を訪問した。ここは第九人民病院よりも更に大きいようで約1,200床ということであった。朱教授ら数人の先生方に出迎えてもらい、応接室のビデオを使って病院の概要説明があった。中国の医科大学は129校があり、うち13校は衛生部（日本の厚生省）の拠点校としてかなり高いレベルの医学教育がなされていると言われている。もちろん上海第二医科大学もそのひとつで、口腔系（歯学部）を有する29校のうちの衛生部拠点校3校のうちのひとつでもある。その附属病院の内でも最も大きく、特に内分泌、心血管、高血圧、整形外科、火傷の部門が特に充実しているようであった。附属研究施設としては高血圧研究所、整形外科研究所、内分泌研究所を同じ敷地内に擁していた。

移植手術も肝臓移植が7例、心臓移植が3例今までに行なわれており、当時の日本が肝移植2例、心移植1例ということからするとその数は驚くに値した。心臓の移植では約3ヶ月の生存を記録したとの事であった。火傷の部門が非常に充実されているとの事で、何故そうなのか、その必然性について質問した。答えは戦争あるいは兵隊さんの火傷の治療をするために充実したとのことで、我々日本国内では殆ど予想出来ない答えがかえってきたのには少々戸惑いをおぼえた。肝疾患も

多いようで、寄生虫による疾患もまだ多いそうである。病理の部屋を見せてもらったが、狭い部屋に数人の若い病理医が顕微鏡を並べて見ている姿はこの国も同じだと親しみを感じた。病理医になりたいと希望する人は多いかと質問したら、非常に少ないとの答えも吾が大学と同じで苦笑した。

午後からは瑞金病院でも我々の講義の依頼があり、30名ほどの若手研究者が参加していた。ここでも熱心な質疑応答がなされたが、講義の最中から、質疑応答の最後までずーと喋っている2人の女性がいた。外に出て行けば良いのにと、今までになく不愉快な気持ちになっていたのだが、後で聞くとところによると通訳に使われた上海語が分からない女性へ、もう一人の女性が通訳をしていたのだそうである。広い中国、言葉も多彩であったのである。言葉には出さなかったまでも、心の中で不愉快に思っていた自分の無知を恥じた。

《帰 国》

実質約1週間の中国の講演と研究所・病院の訪問も27日の午前中で幕を閉じることになった。午後からは学会があり演題を3つも出していると言う王先生、また診察と研究に多忙な羅先生の2人は共に上海空港まで我々を送ってくれた。雨の後のぬかるみの残る上海国際空港の玄関口まで我々の重い荷物が汚れないように気を使いながら運んでくれた。一から十までの全てに亘って、心憎いまでの羅先生と王先生の親切に、力一杯の握手にその感謝の念を込めながら、またの再会を約しつつ空港ロビーへと向かった。

北京では来るべきアジア大会の会場が急ピッチで建設されていた。上海では第九人民病院も、瑞金病院の一角も建設中であった。またいま飛び立とうとしている上海国際空港も大

きなビルへと建設の最中である。今まさに建設の最中というこの広大な中国。我々日本人にとって、かつては文明を教えてくれた中国。この魅力ある中国をまた数年したら訪ねたい

と強く思うようになった。今回お世話になった多くの中国の人々と、これからも長く、しかもより緊密な交流を続けて行きたいと決意しながら大阪行きの飛行機へと乗り込んだ。